

〇一二年三月十一日、東日本大震災が発生し、それに伴う津波により東北地方を中心として沿岸部に甚大な被害を受けた。地震発生当時、私は大学の研究室（九階建物の六階）にいた。これまでにない揺れに本棚から本は落ち、また、ロッカーが激しく揺れた。私自身動揺し、脈が速くなったことを未だに覚えている。大震災後、津波痕跡調査および津波被害調査のために東北地方だけでなく茨城、千葉、東京湾内沿岸等に幾度となく足を運んだ。津波被害の概要については既に多くの報告がなされている。しかし、今後の復興となると、国、県、市町村、また住民の方々との話し合いが数多く持たれているものの、そのスピードは早いとは言えない。すべてに対して一〇〇%満足できる結論を得ることは困難であることから、出来るだけ多くの方々が満足できる結論を導き出し、その方針に向けてスピード感を持って進めていくことが行政・土木業界の今後の役割であると考え


各 人 各 説

## インドネシア、バンダアチェに見た津波災害からの復興

横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授

### 鈴木崇之

Takayuki Suzuki



何もない状況が広がっていた。バンダアチェ西部にあるリディングでは、四八・九層の遡上高を記録した。この津波の七年後となる本年三月、バンダアチェにあるシアクアラ大学に設置された津波防災減災研究センター（TDMRC）と部局間交流協定を結ぶことになり、その一員として現地を訪れる機会を得た。TDMRCは海岸線より約四〇〇メートルの位置にあり、周囲に高台のない平地にある。そのため、このセンターの建物は津波来襲時には避難ビルとして利用できるよう設計されている。また、周囲にも幾つか津波避難ビルが建設されていた。

このセンターでは津波等の自然災害に関する研究だけでなく、防災教育に関しても力を入れている。この防災教育は、今後日本においても力を入れていかねばならない一つであろう。また、話し合いの際、津波によって失ったものは計りしれないが、津波によって内戦が終結したことは失ったものよりさらに大きいことだ。津波以降、海外からも多くの人々が訪れるようになり、津波前とは状況は一変したと話していた。この失ったもの以上に得たものも多い、という答えが非常に印象的であった。

日本においても、まだ震災後一年半ということもあり、失ったものの割合が大きい、建設業界等の力強い復興力により、これまで以上の町、都市ができ、失ったもの以上の価値が出て来ることを信じている。